

武蔵野日曜聖書講筵

キリストはわが力わが歌なり

――詩篇第117篇、118篇――

1988年1月10日

小池辰雄

真実と信実 「ヤーヴェー」と「エホバ」 キリストはわが力 み名にあつて キリストはわが
歌 無然 霊神 十字架の門 永遠の今 なんじはわが神 「5月4日 隅の首石」

【詩篇117】

- 1 もろもろの国よ、なんじらエホバを讃めまつれ。
もろもろの民よ、なんじらエホバを称えまつれ。
2 そはわれらに賜うその憐憫はおおいなり。
エホバの真実はとこしえに絶ゆることなし。
エホバをほめまつれ。

【詩篇118】

- 1 エホバに感謝せよ。エホバは恩恵ふかく、
その憐憫とこしえに絶ゆることなし。
2 イスラエルは率いうべし、
その憐憫はとこしえにたゆることなしと。
3 アロンの家はいざ言うべし、
そのあわれみは永遠にたゆることなしと。
4 エホバを畏るものは率いうべし、
その憐憫はとこしえにたゆることなしと。
5 われ患難のなかよりエホバをよべば、
エホバこたえて我をひろき処におきたまへり。
6 エホバわが方にいませばわれにおそれなし。
人われに何をなしえんや。
7 エホバはわれを助くるものとともに我がかたに坐す。
この故にわれを憎むものにつきての願望をわれ見ることをえん。
8 エホバに依り頼むは人にたよるよりも勝りてよし。
9 エホバによりたのむはもろもろの侯にたよるよりも勝りてよし。
10 もろもろの国はわれを囲めり。



われエホバの名によりて彼等をほろぼさん。

11 かれらは我をかこめり、我をかこめり。

エホバの名によりて彼等をほろぼさん。

12 かれらは蜂のごとく我をかこめり。

かれらは荊いばらの火のごとく消えたり。

われはエホバの名によりてかれらを滅さん。

13 汝われを倒さんとしていたく刺しつれど、

エホバわれを助けたまえり。

14 エホバはわが力わが歌にしてわが救いとなりたまえり。

15 歓喜よろこびとすくいとの声はただしきものの幕屋にあり。

エホバのみぎの手はいさましき動作はたらきをなしたもう。

16 エホバのみぎの手はたかくあがり、

エホバの右の手はいさましき動作はたらきをなしたもう。

17 われは死ぬることなからん。

存なからえてヤハの事跡みわざをいいあらわさん。

18 ヤハはいたく我をこらしたまいしかど、

死わたには付したまわざりき。

19 わがために義の門をひらけ、

我そのうちにいりてヤハに感謝せん。

20 こはエホバの門なり。

ただしきものはその内にいるべし。

21 われ汝に感謝せん。

なんじ我にこたえてわが救いとなりたまえばなり。

22 工師いえつくりのすてたる石はすみおやしの首石となれり。

23 これエホバの成したまえる事にして、

われらの目にあやしとする所なり。

24 これエホバの設けたまえる日なり。

われらはこの日によろこびたのしまん。

25 エホバよ、ねがわくはわれらを今すくいたまえ。

エホバよ、ねがわくは我儕われらをいま栄えしめたまえ。

26 エホバの名みなによりて来るきたものは福さいわいなり。

われらエホバの家よりなんじらを祝せり。

27 エホバは神なり。われらに光をあたえたまえり。
繩つなをもて祭壇の角つのにいけにえをつなげ。



28 なんじはわが神なり。我なんじに感謝せん。

なんじはわが神なり。我なんじを崇めまつらん。

29 エホバに感謝せよ、

エホバは恩恵ふかく

その憐憫とこしえに絶ゆることなし。

●真実と信実

詩篇第118篇の前の117篇というのは、詩篇の中で一番短い。

1 もろもろの国よ、なんじらエホバを讃めまつれ。

もろもろの民よ、なんじらエホバを称えまつれ。

2 そはわれらに賜うその憐憫はおおいなり。

エホバの真実はとこしえに絶ゆることなし。エホバをほめまつれ。

と。ここに「憐憫と真実」という言葉がありますが、これは旧約と新約を通じて非常に大事な言葉です。新約では

「恩恵と真実」

という言い方になっていますが。まあ、日本語の「まこと」という言い方はいいですね。こういうところは、もちろん漢字を当てて、それを「まこと」と読ませるのが一番いい。

ここに「真実」とありますね。この「真実」は本当は困るんだよ。旧約の「まこと」との「しん」の字は信仰の「信」の字を書かないと。「信実」です。この「真」を書くと、

「真実」

というと、気持が主観的にまことであるという。こつちの

「信実」

は相手を持っているんです。

「相手に対して裏切らないこと」

これが信実という。「信」というのは、

「相手をまこととする」

こと。だから、信仰はこつちの「信」です。「信実」という字はもともと「アーメン」「エメツ」という字です。

ギリシア語では「アレタイア」というけれども、

「隠されたものがあるがままだに顕れる」

という字です。内側のものがそのまま偽りなく顕れることが「真実」という。ギリシア語はそういう意味の字です。

ヘブライ語の「信実」は、

「アブラハム、エホバを信ず」



という。あれが、

「エホバをまこととした」

ということ。エホバは裏切らないかた。神さまは、こちら側のいかにかわらず、貫くかた。それが「アーメン」という。あなたはそのものだ。と。「真理」という、「理」という、「ことわり」という意味ももちろん入ります。それから、「真相」、本当の相^{すがた}とにかく、深い内容のものはとても一言では表しきれない。言葉というのは一種の暗号ですから、仕方がない。

●「ヤーヴェー」と「エホバ」

118 篇に入ります。

「エホバに感謝せよ。エホバは恩恵^{めぐみ}ふかく、

その憐憫^{あわれみ}とこしえに絶ゆることなし。

旧約では「エホバ」という。もともと、神の名は

「ヤーヴェー」

という。

「実在者」

という意味です。

「現実が存在しているもの」

という。それから、それを「アドナイ」（わが主）という読み方も、経典を読むときにしてきた。それで、「アドナイ」という母音と、「ヤーヴェー」という子音と、それを一緒にして読むと、

「エホバ」

という読み方になってしまう。だから、

「実在者にしてわが主なるもの」

という、「エホバ」という日本語の読み方が――ドイツ語でもみんな「エホバ」と言っているんですが――かえって、その混同して両方の表現を一緒にした言い方がかえって面白いので、私は「ヤーヴェー」という本来の呼び方よりも、「エホバ」の方が面白いから、あいかわらず「エホバ」という言葉を使っているわけです。即ち、イスラエルに現れた神、それが「エホバ」。ところが、我々に現れた神はキリストなので、私は「エホバは」のところを「キリストは」と書いたわけです。

「エホバに感謝せよ、キリストに感謝せよ。キリストは恵み深く、その憐れみ永遠に絶えることなし」

と。ということは、イエス・キリストと、エホバとして現れた神。「エロヒーム」という神、あるいは「エール」という神と「キリスト・イエス」、これは二者一体なんです。だから、「キリスト」と言おうが、「神」と言おうが、これは離すことができないわけです。そういった



意識をもって読めば、「神」と言おうが――神をまたキリストは「父」と言われたから――「父」と言おうが、どれでもいい。呼び方はどれであろうと、その内容が渾然としてあれば、それでよろしいというわけです。

●キリストはわが力

「キリストに感謝せよ。キリストは恵み深く、その憐れみ永遠に絶えることなし」

この118篇は、もちろん詩篇はおおかたそういうのが多いけれども、祭司と会衆とが交互に歌うようになっていて。この「歌」というのも、みんな「絃歌」ですから。弦楽器伴奏の歌。「わが神、わが歌」という、この「歌」という字が「絃歌」という字です。だから、詩篇は本当はみんな讃美歌です。別な言い方では、詩篇のことを

「テヒリーム」

といつて、

「讃美歌集」

という言い方があるわけです。「ハールル」というのは「ハレルヤ」、讃美するということ。

2 イスラエルは率^{いざ}いうべし、

その憐^{あわれみ}憫はとこしえにたゆることなしと。

この「憐憫」という字は「ヘセッド」という字で、非常に大事な字です。新約でいうと、「アガペー」「愛」のことです。神さまからの愛だから、「あわれみ」という言葉があるのでね、日本語のいわゆる「あわれみ」という、そういった意識ばかりではもちろんない。

この神の愛は実力がありますから、要するに、「愛」は別な言葉でいうと、「救い」なんです。ただ感情的に「愛する」なんていうのではない。相手を助け起こしてしまふ。

「その救いは永遠に絶えることなし」

と。この場合の「恵み」という字は「トープ」という字が使っているな。「トープ」というのは「よい」という意味も持っている。あるいは、「うるわしい」という意味も持っている。けれども、この「ヘセッド」という言葉の方が多い。

3 アロンの家はいざ言うべし、

そのあわれみは永遠^{とこしえ}にたゆることなしと。

「アロンの家」というのはレビ族で祭司の族のことをいう。

4 エホバを畏^{おそ}るものは率^{あわれみ}いうべし、

その憐憫^{あわれみ}はとこしえにたゆることなしと。

「エホバを畏るるもの」と特に言っているのは、他の民族がユダヤ教に改宗したご連中のことを

「エホバを畏るるもの」

という言い方をする。これはユダヤ人の中にはない。他の民族の人たちがユダヤ教に改宗



した。これが「エホバを畏るるもの」。この詩篇はそういう気持です。だから、ユダヤ人であらうと、どこ人であらうと、みんな讚美しよう。

5 われ患難なやみのなかよりエホバをよべば、

エホバこたえて我をひろき処におきたまえり。

6 エホバわが方かたにいませばわれにおそれなし。

人われに何をなしえんや。

特にこの6節はルターが好きだった。ルターの好きな詩篇はいくつもありますが、この118篇が特に

「ルターの特愛の詩篇の一つ」
だという。

「私はこの詩篇を愛する。というのは、いろんな大きな悩み、苦しみ、危険にあったときに、この詩篇の力で私は助けられた」

ということを彼が告白してます。

「神さまが、キリストが、わが方にいませばわれにおそれなし。人われに何をなし

えんや」

と。詩篇27篇の始めの方にも似たような言葉がありますが。

「キリストはわが力」というのは、この6節もまさにそうですね。この「人」という字は「アダム」という言葉が使ってあるな。

●み名にあつて

7 エホバはわれを助くるものとともに我がかたいまに坐す。

この故にわれを憎むものにつきての願望ねがいをわれ見ることをえん。

まあ、旧約だから、こういう言い方をしますけれども。

8 エホバに依り頼むは人にたよるよりも勝りまさてよし。

まさにそのとおり。ひと頼みではない。キリストに頼めと。それは、お互いに信仰のある人たちが互いに助け合ったり、あるいはない人をも助けたりするのは結構なことなんだけれども、根底に、神の助け、キリストの助けがあることが本当の力ですから。

「何まさかに勝る」

という言い方はよく出てきます。

「武力により頼んでもダメだ、王様により頼んでもダメだ」

と、いろんな句が出てきますけれども。

9 エホバによりたのむはもろもろの侯きみにたよるよりも勝りまさてよし。

いわゆる権力者におもねったって、そんなのはダメだと。

10 もろもろの国はわれを囲めり。



われエホバの名によりて彼等をほろぼさん。

これは外敵に対して。この「名によりて」は「名にありて」です。名の中で。「よりて」という訳ではちよつと弱くなる。「み名によつて願う」というのはひとつの習慣的な言い方になつていますけれども、「み名にあつて」がいいですよ。「にある」というのは「み名の中で」ということですから。

「二、三人、わが名の中へと集まるところには私もいる」

とキリストが言っているのがそうです。あれは「の中へ」ということだから。

「キリストの名にあつて」

と、パウロもペテロも言っている。「にあつて」という「イン」の字です。何でもその中に入っていないければ力が来ないですから。ここに「方にいます」というのは、その「わき」ですけれども。「共に」というのがその「わき」の方なんだ。しかし、「の中」は、こつちの中に入ってしまうから。「共に」も「中に」も、いろんな表現をしますけれども、究極のところは「中」でなければダメです。

「キリストは神の懷の中にいた」

という。だから、我々も遠くで祈っているのではない。キリストの中へ入って、キリストの中に入つて祈る。これを祈り入る、

「祈入」

という。祈りの世界でそこを實際にやっていないと力は来ないですよ。だから、私はいつも言っているとおり、「信仰」「こう」の字は「仰ぐ」ではダメだ、交わる世界に入らないと。信じ交わる世界、

「信交」

だと言うわけです。

¹¹かれらは我をかこめり、我をかこめり。

エホバの名によりて彼等をほろぼさん。

¹²かれらは蜂のごとく我をかこめり。

かれらは荊の火のごとく消えたり。

面白いことが書いてあるね。

われはエホバの名によりてかれらを滅さん。

¹³汝われを倒さんとしていたく刺しつれど、

エホバわれを助けたまえり。

これも

「エホバの名にあつて」

です。まあ、敵をやつつけるという旧約的な言い方です。新約では、「相手を滅ぼす」という言い方はあまり出てこない。サタンはやつつけますけれども。サタンに囚われている者を、



今度は、サタンから相手を救い出すということはあるけれども。

●キリストはわが歌

その次の、第14節がこの主題です。

¹⁴ エホバはわが力わが歌にしてわが救いとなりたまえり。

この句は、本来はどこにあつたかというところ、出エジプト記15章にある。歴史的な言葉なんです。

「是に於てモーセおよびイスラエルの子孫この歌をエホバに謡う。^{うた}云く、我エホバを歌い頌ん。^{ほめ}彼は高らかに高くいますなり。彼は馬とその乗手を海になげうちたまえり。

「馬」というのは軍馬のことで、エジプトの軍馬とその乗り手、騎兵を紅海の中になげうちたまえりと。これは出エジプト記14章の歴史的な記事のあとに出てくる歌なんです。その次の2節、

² わが力わが歌はエホバなり。彼はわが救い拯となりたまえり。

と。全くそのとおりの句が出てきている。

彼はわが神なり。我これを頌美ん。^{たたえ}彼はわが父の神なり。我これを崇めん。^{あが}」(出

エ15・1・2)

ここところは非常に力強い句ですね。

もう一辺、預言者イザヤが使っている。イザヤ書12章、

「その日なんじ言わん。エホバよ我なんじに感謝すべし。汝さきに我をいかり給いしかどその怒りはやみて我をなぐさめたまえり。

その次です。

² 視よ神はわが救いなり。われ依頼^{よりたのみ}ておそるるところなし。主エホバはわが

力わが歌なり。エホバは亦わが救いとなりたまえりと。」(イザヤ12・1・2)

この三か所で同じ言葉が出ている。まさにこの三か所です。出エジプト記とイザヤ書と今の詩篇と。もちろん、詩篇は、こういった前の句をそこで使ったということだと思えますけれども。

その歌が即ち、絃歌。だいたい、豎琴です。豎琴といったって、手に持てるような小さな豎琴です。「歌」というのは「ジムラー」といって、「ザーマル」という言葉がくる。それがもうひとつ熟すと、「ミズモール」という。「ダビデの歌」というときには「ミズモール」と書いてある。ここでは「ジムラー」と書いてある。「ザーマル」というのは、「弦楽器伴奏で歌う」という字なんです。

「エホバはわが力わが歌にしてわが救いとなりたまえり」と。



私は、今度は歌を――私のは絃歌でも何でも無い。しかし、もちろん絃歌的なものもありますけれども――これから12年かかって作る。実は前にもう始めていた。七百行くらい書いていた。けれども、それは全然止めるわけではないけれども、構想が少し変わってきたものだから、今年から新しく書き出します。内容については、また構造については、でき上がるまでは、誰にも何にも言わない。まあ、それで楽しみにしてください。12年たったら――ダンテみたいな地獄は書きません。けれども、とにかく宇宙的な詩ですから――大変な詩ができるつもりです。

それは、キリストがわが力、また知恵、響きとなつてくださるからできるので、それでこの句が特に私には大変な句になった。告白する句になった。だから、エホバではなくて、「キリストはわが力、わが歌にして」と。あとの方の「わが救いとなりたまえり」は略してしまつたんですが。救いはもちろん救いです。

あなた方も、新年の最初にあたつて、

「今年はこのことはやつつけてしまふぞ」

「こういうように三段構えでいくぞ」

「この本は読み上げるぞ」

「聖書はどのようにして読んでいくぞ」

とか、いろんなことをあなた方は計画しましたか。

「マンデンクト ゴットレンクト
“Man denkt, Gott lenkt.” (人は思い、神は導く)
という言葉がある。

「人はいろいろ計画を立てるが、それをどのように導き給うかは神さまが具体的になさる。」

という。もちろん、計画を立てるときに祈り心でやるわけです。

ある年賀状に、

「先生はこれから大変だから、もう集会もやめて打ち込んでください」

なんて言ってくるのがあった(笑)。ちよつとこの集会ばっかりは、私はやめるわけにはいかん。これは皆さんと一緒に展開していく。集会をすることは、語るも聞くも、同じくキリストの力にあずかつていく大事な源泉だからね。日曜日はオアシスだから。

●無然

去年の秋期福音特別集会の第2回集会で「童心」と題して語った記事が、今度の『エン・クリスト』第33号に載っています。その一節を読みます。

「イエスの神信頼は童心なのである。偉大な人物は心の奥にこの童心を宇宙の絶対者に対して持っている。ダンテもゲーテも良寛も南洲もそうであった。そうでないと本



当の偉大性はない。どんなに偉そうであっても、神の前に童心なき人間の偉さが何だ。童心、無心の心をもつと、神の心が入ってくる。キリストの心が宿る。それが聖霊の本質である。童心はもともと母親の愛を全存在で体受体感するところに生きる心であるから、神、キリストの愛を飲み且つ喰うところに生きる心である。純然・無然たる心である。

ここに

「純然・無然たる心」

と書いた。「無き然り」という。自分を何ものともしないのを

「無然」

という。おそらくこういう言葉はいまだかつてないでしょう。

神、キリストを生命とするから、靈然たるものとなる。人間的な偉さとは次元を異にする。無然靈然たる偉大さが備わっている。幼児はこのような人となるべき泉であり、小川であるのに少年、青年、大人となるにつれて、その大切な童心が害われ失われて、混濁の波立ちさわぐ川となるとは。童心の者の滅び行くのはキリストにとって耐えがたい悲しみであり、怒りでもあった。それは天意ではないと烈しく語った。」「『エン・クリスト』第33号、1988年冬季号13頁)

「純然・無然・靈然」という。キリストだけは

「神然」

です。これは我々はちよつと使つてはダメです。キリストは神然。神然り。キリストだけは神然たるひとだ。

「キリストはわが力」

と言うときには、自分の側は「無然」たるものです。そうすると、力が100%に入ってくる。これはもう十字架で無然とされているわけだ。神・キリストを一切として、ちょうど太陽の光を全身で浴びるような境地だ。お釈迦さんでもいいよ。靈気を吸わなければダメなんだよな。そのコツがわかっただら、もう楽になるし、楽しくてしょうがないし、力は来るし、何を読んでもどんどん入っていくし、英語の単語なんかどしどし覚えてしまいうし、とにかく勉強が楽しくならなければ本ものではないんだよな。

英語で「エンジョイ」という。これは「イン・ジョイ」なんです。「喜びの中にある」ということ。喜びの中にあつて、ものをするような境地が本当だ。何でも始めは辛かったかもしれないけれども、喜びが伴ってきたら、必ずこれは本ものになる。喜びを求めるのではない。やっているうちにうれしくなってくる。何事も、「遊び」「シュピール」の境地です。やっていることが本当に楽しい。小さい子が本当に夢中になつて遊んでいる。

私は孫を幼稚園に連れて行って、また迎えに行くわけだ。孫は夢中になつて遊んでいるのに、名を呼ぶと、パツとやめて飛んでくる。あれがその童心の姿なんだね。



「ちよつと待つて！」

なんて言わない。一生懸命に遊んでいるのにパツとやめて飛んでくるから、私はそういう姿が本当のキリストの喜びたもう姿だと思ったね。即だよ、本当に。ちよつと大人には考えられない。

「ちよつと待つて、これまだ終らないから」

なんて。「ご飯ですよ」と言ったら、子どもは即やつてくる。大人はなかなかそうじゃない。

「今、仕事の最中で困る」

なんて。ところが、即で動くと、今度はそれにまた別なひらめきがくるんだよな。

「手紙がきたり、郵便がきたら、即、返事を書け」

とはヒルティが言ってます。

それで、皆さんも、どうぞ今年は、

「キリストはわが力、わが歌なり」

と。「歌」とはなにも詩を書くことではない。歌というのは、本当に讃美すること。

「キリストはわが力にしてわが讃美なり。また救いである」

ということをいよいよ体験して進んでください。また、おおいに一对一の伝道をやってください。『エン・クリスト』誌をポケットやハンドバックに入れておいて、

「ああ、このひとは読ませたい」

と思つたら、あげてくださいよ。無駄になつたつていいんです。

●霊神

15 歓喜よろこびとすくいとの声はただしきものの幕屋はたらきにあり。

エホバのみぎの手はいさましき動作はたらきをなしたもう。

16 エホバのみぎの手はたかくあがり、

エホバの右の手はいさましき動作はたらきをなしたもう。

これは面白いね。ユダヤ教というのは、神さまは手があつたり、足があつたり、目があつたり、まるで人間のようにとり扱っているわけだ。人格というように。けれども、決して偶像にはしない。絶対にこれを偶像にしない。そこが霊的な神であり、同時に人格的な神という、そういうことが聖書の宗教の非常に健全な内容なんです。

「汝にとつては、我が神だぞ」

と、イスラエルの民に言つた。モーセの十誡の第一言。

「何ものをも刻むべからず」

「偶像神ではないぞ、霊神であるぞ」

と。その人格神をキリストは「父」と呼んだ。「母」と呼んだつて構わないんだ、呼び方は何だつて。まあ私みたいに自由なのはちよつといないかもしれない。すぐ概念で規定して、



「どうだ、こうだ」

と論議する。そんなことは要らない。言葉はみんな暗号だから。

「本当の世界が、本当にその奥の世界がつかめているか」

ということだけが問題なんだ。

「右の手」というのは力を表す表現なんです。あるいは「角^{つの}」という言い方もある。ミケランジェロが造ったモーセには角がはえているね。あれは角ではない。あれは力の象徴なんです。毛が少し上の方に角みたいになっている。あれは偉大な像だね。とにかく、ルネッサンスは、宗教改革に向かつてのイタリヤの芸術は大したものだ。

17 われは死ぬることなからん。

ながら 存えてヤハの事跡をいいあらわさん。

これはルターがコーブルクの城で祈っていて、これを書いた。そして、

「どこまでもこの福音を伝えていく」

と。なぜ、ルターがこの、

「われは死ぬることなからん」

という言葉に共感したかという、ルターはいつ捕まって殺されるかわからない。だけれども、死なないと。

ながら 存えてヤハの事跡をいいあらわさん

と。「いいあらわさん」はもちろん終りまでやりましたけれども、大事なのは、旧・新約の訳です。まだ、この時は旧約聖書は完訳してない。旧約聖書の翻訳が終ったのは1543年だ。あと3年たってルターは死んでしまったんだから。亡くなる3年前です。新約聖書は1521年から始まって2年で全部を訳してしまっただから、大変なもんだな。ドイツ語の聖書ができたので、ドイツ語はそれでもってまっただから、大変なもんです。ルターが一番大きな仕事はやはり聖書の翻訳です。

18 ヤハはいたく我をこらしたまいしかど、

わたくし 死には付したまわざりき。

そのとおり。ルターもその経験をしたから、非常にこれは自分の詩だとした。

●十字架の門

19 わがために義の門をひらけ、

我そのうちにいりてヤハに感謝せん。

この歌は城門に入る時から歌いだす。だから、「義の門」なんていう言い方をしている。我々にとっては、「わがために義の門」はキリストのことです。キリストは、

「我は門なり」

と言ったが、私たちにキリストの義を与えたもう。義というのは、神さまの御意を徹底的



に行うことが義ですから。それを我々はいただいて、その力でもって動いていく。

20 こはエホバの門なり。

ただしきものはその内にいるべし。

キリストの義をいただいた者がこの「ただしきもの」だね。我々はキリストの義をいただいて、義人である。罪びとにして義人である。ルターが言っているとおり。生まれながらの我々は罪びとにすぎない。けれども、キリストにあつて生きるときには、これは義人である。そういう二重構造になる。「門」というのは、私は、門の中に十の字を書く。十字架の門です。

21 われ汝に感謝せん。

なんじ我にこたえてわが救いとなりたまえばなり。

22 工師いえつくりのすてたる石はすみの首石おやしとなれり。

これがまたキリストの大好きな言葉なんです。新約聖書にたくさん出てくる。これが引用されている。マタイ伝にもマルコ伝にもルカ伝にも。それから、あと書簡にも。パウロの中にも、ペテロの中にも出てくる。使徒行伝4章、ペテロ前書2章、マタイ伝21章、マルコ伝12章、ルカ伝20章。

工師いえつくりのすてたる石

大工さんが捨てた石が、実は

「すみの首石おやし」

となるという。キリストは、

「預言者はみなその故里ふるさとにいれられない」

と言われた。一般に受けとられない人が実は逆にみんなを支える人になるんだと。

とにかく、神の民は、白波蹴つて突進して行かなくては。烈々たる力をいただいでくださいよ、キリストから。男も女も、老いたるも若きも。年齢なんかもう超越してしまっている。お互い助け合っていく。

日本人は、「経済大国」なんて言ったって、何だこれは。経済退国、経済頹国だ。これは私は国を愛するから言うんです。太陽の国旗を持っていて、みんな国旗をいい加減にしているね。私は正月の1日から3日まで国旗を揚げっぱなしだ。

「あれはキチガイじゃないか」

と思うかもしれない。それは気が違っているよ、普通よりか。

太陽はもう大変ですよ。

「単純なる偉大さ」

という。これは世界の最高の国旗ですよ。それをなぜいい加減にしているか。そういう自覚をなぜ持たないか。国旗を掲げると軍国主義だと思う。そうじゃないよ。

太陽がなくなったら、地球はどうなるんですか。地球上の我々はどうなるんですか。自



然的存在としての太陽は絶対的なものなんだ、自然界において我々にとっては。地球を引っ張り回している。いわんや霊界の太陽なくして生きられるかと。ゲートは太陽が好きだったから、ゲートはドイツの国旗を太陽にしたかっただろうな。

私は、昼は太陽の詩人ゲート、夜は星の詩人ダンテを相手にして旅を進めます。昼も夜も、ゲートとダンテを一番の相手にして。これはキリストが中心だから、何でもできるんです、正直。それくらいキリストというのは一切の概念を超えた驚くべき人なんだ。一般のキリスト教とは違うんだ。人間の側からキリストを限定したらダメですよ、無限定の世界だから。だから、仏教の一流のものだつて全部読めるんです、キリストの光で。楽しく読める。

「ここまででは福音で、ここまででは福音でない」
なんて、そんなくだらないことは考えない。

●永遠の今

²³これエホバの成したまえる事にして、
われらの目にあやしとする所なり。

まさに然り。人にけなされたり、捨てられたら、かえつて神さま、キリストに拾われるよ。何にも心配いらんよ。

²⁴これエホバの設けたまえる日なり。
われらはこの日によるこびたのしまん。

²⁵エホバよ、ねがわくはわれらを今すくいたまえ。

エホバよ、ねがわくは我儕^{われら}をいま栄えしめたまえ。

はつきりそう書いてある。

「この日、この今」

「²³にちにちこれこうじつ」
という。「日日是好日」ということ。私みたいにもう80歳を越えたと、「時は金なり」どころじゃない。時は金よりも尊い。いい加減に過ぎすわけにはいかん。考えてみると、ずいぶん無駄な月日を送ったことを思い出すよな。けれども、時間の長短はそれほど問題ではない。問題は質的にどのように時間に対処しているか。時間というものを永遠にすることが出来るから。それが

「永遠の今」

ということ。「永遠の今日」という。質の問題だから。一か月を本当に生きた人は、百年いい加減に生きた人よりも本当に生きた人になる。

医学や医術が進歩して、酸素吸入や注射、点滴で、いろんなことをやって、助からないような人間をただ引き延ばして、なにか妙に体が膨らんだりしてき、ああいうのは悲惨だよな。だから、私は、

「私は自然死でいきます。余計なことはするな」



と宣言しようと思う。とにかく、自然の法則に反すること、神の法則に反することは、いいことはないわけだ。医学の祖のヒポクラテスが言っている。

「人間は天からいただいた体力、本来の自然の力と環境の自然の力によって治るようになってる。医者や薬は補助にすぎないんだ」

と。もう医学の祖はちゃんと本当のことを言っているのね。皆さん、その本当の道を歩きましょう。

●なんじはわが神

26 エホバの名^{みな}によりて来る^{きた}ものは福^{さいわ}いなり。

われらエホバの家よりなんじらを祝せり。

27 エホバは神なり。われらに光をあたえたまえり。

繩^{つな}をもて祭壇の角^{つの}にいけにえをつなげ。

「キリストは神なり。われらに光を与えたまえり」

と。もう全くそのとおり。こないだ、クリスマスで言ったでしょ。我々自身がキリストの光にならなくて、なんだと。キリストは神の光、我々はキリストの光。光の光源はキリストで、光の現象は我々です。

「汝らは世の光なり」

とはそのことなんだから。

「なかなか光になりません」

なんて、「なりません」ではないよ。受けとればいいんだ。自分でなろうとしたって、それは無理だよ。まるで懐中電灯みたいなものだ。だんだんダメになる。キリストの光を受けとって虹のように光ればいい。

「私は青く光ります。あなたは黄色く光ります」

と。それぞれの光はみんな色が違っている。いろいろなんだ。

「あれは青か。俺も青くなろう」

なんて、そんな必要はない。みんなキリストを受けとると、その人らしい光が出るんだから。人真似はいらん。だから、私は

「召団は全体主義ではないよ」

と言っている。召団は大いに各個でいい。ただし、それが大きなハーモニーになれと。大調和となる。虹のごとく。そして、お互いにおける光を通して神さまを讃美すればいい。もっと楽しい人になってくださいよ、みんな。あまり七面倒くさい人にならないで（笑）。なにか楽しさが足りないようだな。小池先生はおっかないんだよ、ひとつも。

「小池先生はおっかない」

なんて思っ、何もしゃべらないと、先生が一番さびしいよ。何でも言うてください。



28 なんじはわが神なり。我なんじに感謝せん。
なんじはわが神なり。我なんじを崇めまつらん。

29 エホバに感謝せよ、

エホバは恩恵ふかく

その憐憫とこしえに絶ゆることなし。

「なんじはわが神」という。私の神さまだと。「わが」という。「わが」が「われわれの」になるけれども、その本当の「わが」ということが言えなければダメです。告白はみんな、「わが神、わが救い主、わがキリスト」ということ。ここにちゃんと書いてある。

「キリストはわが力、わが歌なり」

と。あなた方一人びとりがそう言うわけだ。

「そうですか、小池先生のですか」

なんて。そうじゃないよ。あなた方一人びとりのもの。「わが」ということ。何でも聖書は、「神―キリスト―我」

との関係において読むことです。これが三人称であろうと、未来であろうと、過去であろうと全部、現在、一人称、二人称の世界です。それが信の世界なんです。それが信実の世界、恩恵の世界なんです。「まこととめぐみ」というのはそういうことだよ。

●「5月4日 隅の首石」

この118篇というのは力あるところの楽しい詩篇ですよ。だから、私は詩篇118篇も第十巻に選ばざるをえなかった。あなた方は早く読みたいだろうね。これは「5月4日」のところ、「隅の首石」という題だ（小池辰雄著作集第十巻『聖書は大ドラマである』179頁）。

19 我に義の門開け、我その中に入りて神に感謝せん。

20 是は神の門なり、義人はその中に入るべし。

22 建築師らの棄てたる石は隅の首石となれり。

23 是は神に由ることにして我らの眼に奇異とするところなり。

25 神よ、願わくは今救い給え、神よ願わくは今榮えしめ給え。

27 神は神なり、彼は我らに光を与え給えり。

28 汝はわが神なり我汝に感謝す。わが神よ、我汝を崇めまつらん。

29 神に感謝せよ、恵福深く、その愛は永遠なればなり。

これは118篇の後半だったな。前半は「神はわが力、わが歌、わが救い」という題で、「5月3日」ところです。

1 神に感謝せよ、恵福深く、その愛は永遠なればなり。

6 神はわが方に在ます、我は怖れず、ひと我に何をなし得んや。



8 ^{エホバ}神に依り頼むは人にたよるよりも勝りて善い哉。
 14 ^{ヤハ}神はわが力わが絃歌にしてわが救いとなり給えり。
 15 ^{よろこび}歡喜と救済の声は義人の幕屋にあり、^{エホバ}神の右手は強き業を為し給う。
 17 ^{なから}我死なずして生き存え、^{ヤハ}神のみ業を語り伝えん。
 18 ^{ヤハ}神はいたく我を懲らしめ給いしが、死には渡し給わざりき。
 これが前半だ。

「本詩第一節は最後の第二九節と同じで、神の愛が永遠不変であることを高らかに讃美している。旧約のこのヘセド (HESSED) 愛という語はツエデク (ZEDDEQ) 義と共に重要な語である。神の愛の相は時と場合に応じて千様万態であるが、愛であることに於ては永遠不変で、(要するに救である。) 神は愛に価しない惨憺たる人間私を愛し貫いてくださっている。(私はこれに感激して立ち帰らざるをえず、神を愛しざるを得ない。神の愛の力で愛しぬく愛が即ち神の義である。) その神の愛の体現者はキリストで、彼の愛も義も無条件に賜わる。それが恵である。かかる神、キリストに立ち帰ってやまぬ人間の在り方が信仰、信行、信交である。これが神を愛するということだ。

このような愛の神が第十四節の「わが力」、「わが歌」、「わが救い」である。第十七節はルターがコーブルク城幽居の際に貼紙をして祈った聖句で私はこの眼で見えて来た。」それから、「5月4日」の、さつき読んだところ。

「我々にとって義の門とは何か。「我は門なり」と言ったキリストこそ、義の門である。神の義人キリストの門を平伏して通れば、彼の義が与えられる。

さて専門的宗教人たる教法師や祭司やパリサイ人に排斥され、大衆にも裏ざられ、弟子供にも理解されず、棄てられた石 (マタイ 21・42、ルカ 20・17、行伝 4・11、ロマ 9・32、10・11、エペソ 2・20、ペテロ前 2・6〜8) となったキリストは家の礎石として最も大切な隅の首石となった。即ちキリストは人間界の精神的、宗教界の霊的、中心となった。イザヤが「試練を経た石、貴き隅石」と預言したのはキリストであつた (イザヤ 28・16)。
^{エホバ}実存主は力の神であり、キリストは永遠の愛たる救主である。」

私の第十巻のところをちよつとご紹介しました。短いですが、非常に読みやすい。創世記から黙示録の大事なところをグーッときてすまから、この一卷を読むと、ある意味で、聖書を読んできましたようなことになってしまふ。必ず聖書を右にして読んでいただきたいわけです。そして、その前後を読まれると大変いいわけです。

そういうわけで、今年はいよいよ、キリストのみ力にあずかりながら、力強く進んで行きます。終わります。

